

## ドイツ表現舞踊の命運

副島 博彦

ドイツ表現舞踊は、菜食主義運動、ヌーディズム、ワンダーフォーゲル運動、田園都市運動など19世紀末に始まる生活改革運動を背景に成立した。このオルタナティヴ・ムーヴメントは、反産業化反都市を標榜し、各々運動のなかで共同体を模索しながら、各々が志向する身体イメージを結んでいった。例えば、田園都市運動から生まれたヘレラウのリトゥミックによる「現代人の非リズムの病」<sup>1)</sup>から回復した身体、モンテ・ヴェリタの神秘主義的、エクスタティックな身体などだ。しかし、これらの運動の多くは、社会批判的ではあっても、政治に直接コミットするものではなく、身体による自己実現という「生命力にあふれた、歴史上ユニークな近代のアイデンティティ」<sup>2)</sup>の形成という内面化へのベクトルをもっていた。

エルンスト・ブロッホは『ユートピアの精神』(1918)のなかで、「トータルなドイツの民族身体の再生」を唱道しているが、ドイツ表現舞踊の担い手たちも、ダンスによる自己実現を若者たちにアピールするいっぽうで、「始源の身体」へ遡及する「ドイツ独自の舞踊芸術」(ヴィグマン)によって、「想像の共同体」国民国家ドイツの形成に与っていった。

ヴィグマン、ラバンを軸に成立しつつあったドイツ表現舞踊は、第一次大戦後、この国民国家の新しい文化として参入し、国民文化のひとつとしてカノン化を目指した。このプロセスは、舞踊批評家フリッツ・ベームの『Die Deutsche Allgemeine Zeitung』紙学芸部での活動(1919-45)、ヴィグマン学校の創設(1920)、ラバンのハンプルク・バレエ芸術監督就任(1923)、ラバノテーションの開発(ca. 1923-)、第1回ダンサー会議(1927)などを里程に進むが、同時にそれは、個の実存の表現と集団の表現との矛盾を引き起こすことになる。例えば、アンサンブル作品におけるグループとリーダーとの関係は、1920年代の舞踊理論の中心的なテーマのひとつとなったが、ヴィグマンのアンサンブル作品の頂点といわれる『Feier』(1928)では、ソロがリードするいっぽうで、グループはソロのカウンター・パートとして機能する。これは、群衆が個にとって脅威であり個を破壊するモノという表現主義の群衆を巡る議論に呼応している。それに対して、『Frauentänze』(1934)では、この脅威というアスペクトがなくなり、グループは多くのばあいソロの増殖したコピーとなり、グ

ループの任務は、主導的なソロを支えることに変質する。だが、ヴィグマンのダンスの本領は個の実存の表現であり、たとえ彼女がナチズムに共鳴し、ヴィグマン学校がアーリア条項を遵守してナチスから助成を受けていたにせよ、ナチスにとって利用価値は相対的に低かった。

これに対して、早くからコーラス舞踊運動によって集団表現、大衆参加を実現していたラバンは、ナチスの意を迎えながら、文化政策の圏内で権力の階段を昇っていく。例えば、1930年にベルリン国立歌劇場のバレエ監督に就任していたラバンは、ナチスが政権を掌握した1933年、劇場の児童バレエ・コースから非アーリア人生徒を排除するが、それは、非アーリア人児童の就学が禁止される5年も前のことだ。1934年、国立歌劇場との契約終了後ナチス宣伝省へ移ったラバンは、「ドイツ舞踊祭」を企画運営し、翼賛舞踊家団体「ドイツ舞踊舞台」を組織し、検閲プログラム「舞踊試験規定」を起草し、ダンサーのための教育キャンプを開設するなどナチスの舞踊政策で主導的な地位を確立した。ラバンの活動は、1936年のベルリン・オリンピックと「国際舞踊コンクール」「オリンピック青少年芸術祭」などの関連イベントや、国立舞踊大学に相当する「ダンス・マイスター工房」設立で頂点を迎える。しかし、同時にこの時期は、「第三帝国の確立期」から「戦争体制への移行期」への転換期だった。例えば、ナチスの主導で1933年に始まった古代ゲルマンの集会を擬した「ティング」運動がこの時期を境に公的な支援を失い下火となったように、権力を確立したナチスは、それまで活用していた神秘主義的な制御不能なカオスを内在した身体文化を危険視して、よりストレートに「従順な身体」を作り出す身体文化を優遇する政策に転換していった。ゲッベルスによるコーラス舞踊『春風と新しい歓び』上演禁止、帝国演劇部会追放、神秘主義秘密結社の会員であることへの弾劾など、ラバンが「亡命」を余儀なくされる彼に対する処遇の変化もこの政策転換の結果だといえるだろう。

註

- 1) Wolf Dorn: die Aufgabe der Bildungsanstalt Jaques-Dalcroze, in: die Gartenstadt Hellerau, Hellerau-Verlag, 1992, S.47
- 2) Eric Toepfer: Empire of ecstasy, University of California Press, 1997, S.10